

# 中世文学史の一隅

——遁世僧の営為の痕跡を辿る（旧稿の補遺を兼ねて）——

牧 野 和 夫

はじめに

中世の遁世僧についての視点が急速に転換（深化）しつつある現在、「遁世僧」に関する旧稿の補遺として一、二の指摘を行い併せて新出資料の簡紹を試みることにしたい。中世の頻繁な渡宋を支えたひとつの要因に宋代の新刊典籍（いわゆる宋版仏書）の移入を希求した僧俗の存在を挙げることには異論はないであろう。しかし、その受容を中世文学史の裾野の一隅にでも位置づけようとする姿勢は、今もなお希薄であるようであるが、その重要性を究めようとする研究は、小林直樹氏『『閑居友』における律—節食説話と不浄観説話を結ぶ—』（『国語国文』84巻10号 平成27年10月）を始め、顕在化しつつある。ここに旧稿の補遺を通

じて改めて大方の注意を喚起しようとするのは、『七天狗絵詞』をはじめ、埋もれた「遁世僧」の位置付けの検討を抜きにして中世文学の多くはその成立・生成過程の解明に足場・手がかりを失うのではないかと危惧するからである。

一、「観勝」寺上人・円珠上人、―無住の「立ち位置」―

埋もれた「遁世僧」の足跡は、そのまま忘れられた諸宗「包兼」修」の動きであり、同時に泉涌寺系・戒壇院系に顕著な作品群の「欠逸」を意味するのである。かりに日本における中世の「文学史」的な「うねり」の再構築のために、軸となるひとりの「遁世僧」を取上げて挙げるならば、入宋

経験のない真空であろうか。海彼（道人・祠堂・私堂などの展開、そして勸進、たとえば刊大藏經の勸進や唐土寺院修補木材の勸進などをも視野に）を強烈に意識した遁世僧として典型的な生涯を送った一人に廻心房真空がいた、と思われる。遁世を希求した醍醐寺成賢―クリーブランド美術館蔵「成賢僧正像」に象徴される―の「入宋」「遁世」の志を継承した入宋僧頼賢などにも通ずるものである。更  
に言えば、頼諭との関連で重要な木幡観音院、そして泉涌寺・戒壇院・金剛三昧院・寿福寺などの拠点寺院に印された真空の足跡（軌跡）に連動し輻輳してくるひとつの抗しがたい「渦」があった、と云える。その「動き（渦）」の所産として忘却の果てから浮かび上がってきたつある諸事象に対して無住の著作や延慶本（長門本なども）『平家物語』を始めとした十三世紀中期以降の「文学」は無縁ではありえなかったのではないか、と考える。

『円照上人行状』には「唯空房経照」という僧の寺院遊歴がつぶさに記述される。「北洛人也、興福寺住僧、…後厭世榮、住戒壇院、暫移西大寺、受沙弥戒於観尊上人、後還戒壇、受比丘戒於圓照上人、厥後或住善法寺、或住金山院、住東福寺、修習禪法、乃彼開山圓爾禪師之時也、後住菩提山、為唯観上人真言上足付弟、為衆所推、即作一山灌頂大阿闍梨、……」（10頁上段）とあり、その修学に赴いた数々

の寺院と相承就学した諸々の師において無住に似たものを確認できる。円照門下の履歴は、概ね「住―移―還―後住―」などという列記が常であり、いうなれば、「移動」が常であること、そこには移動して優れた師に出会い修学することを是とする風が端的にうかがわれるのである。南宋の唐土における「十方僧」に相似た、常に移り止まない歴訪の旅が背景にあったのである。しかも、『行状』は遠く離れた寺院へ足繁く移り、一所に留まることをよしとしない僧侶の履歴で満ち満ちていることに改めて驚くことになる。

「遁世」が都近くの庵室（閑居）への転居という「形」をとること（この形は遁世僧の晩年に「閑寂」「閑静」の地に「閑居」という「形」をとることで継続）は少なく、むしろ宗派を問わぬ良き師（入宋僧など）を求めた積極的な遊歴修学へ「移・住」を促すものとなっていることに留意しなければならぬ（かつて「タテ」から「ヨコ」へと表現したもの。ネットワークとも）。無住にしても、近年の研究の進展によって足繁く南都へ赴いていたことが知られるに至った。こうした遊歴の姿勢は、ある一時期（九条道家の活躍期を中心に）に集中し、泉涌寺・法華山寺を軸として戒壇院などの寺院システムを通じて急激に東国・西国へ展開したようである。この一時期は、東国を考える上

で極めて重要な時であるが、宗派史研究の延長線上に遡及すると忽然として「消滅」せざるを得ない宿命を負った空白期でもあった（立川流の問題とも时期的に係わる）。

この最も唐土との接触に意を砕いた僧俗の重要な活動のひとつが宋版仏書の舶載（新刊を中心に）・出版にあったらしいことは追々明らかになりつつあり、都を迂回するネットワークも十二世紀（関東武士のネットワーク）との関連が興味深い。後述の相模松田西明寺・伊豆山寺・駿州智満寺・越州坂北豊原寺）には既に確立しつつあった（多くは「山寺」の形態をとる。上川通夫氏「中世山寺の基本構造・三河・尾張の例から」〈『愛知県立大学日本文化学部論集・歴史文化学科編』2014〉ほか）ように思われる。

無住の「立ち位置」の確認からはじめることにする。とくに「観勝」寺上人と円珠上人の問題が留意されるのである。無住の『夢想記』と『（無住撰述）三昧耶戒作法』に二点に刻印された、この二人の遁世上人の重みである。観勝寺上人良胤と無住については、牧野和夫『沙石集』論「円照入寂後の戒壇院系の学僧たち」（『実践国文学』81号 2012・3）「三、大円上人良胤」を参照願いたい。ここでは触れなかった『愛知県史』資料編8中世I（平成13・3）が「無住自筆。無住の没年にかけて便宜ここに収める。」と注記して紹介した一点『夢想記』である。

a 一七〇八 夢想記 長母寺文書

□僧 □□寺

夢想事、当寺行始残、次年讓知僧了、彼僧不受真言、万事皆故静観上人意、仍寺ヲ去テ別独住ニ可住処、夏夜夢二方丈二間所（聖教ノ処也）、着浄衣俗直烏帽子、気高二御坐テ、

殊勝蓮花ニ向テ持長念珠念誦、如夢想観勝上人歟、八幡大菩薩如法渴仰云々、其朝彼夢者依小事、腹立シテ寺ヲ奔去了、真言依悪故歟、八幡御計歟、仍其密教智儀、無退転、

近時、刊行をみた禅籍叢刊『無住篇』（法蔵館）に再録され、阿部泰郎氏が総説にこの文書の有する意義を解説し、「観勝上人歟」を観勝寺上人即ち大円上人良胤か、との推測を記したものである。無住の教学上の決断を左右する夢想到に係わった重要な人物として「大円上人良胤」が比定の候補に挙げられている。

かつて『沙石集』論「円照入寂後の戒壇院系の学僧たち」（『実践国文学』81号）において「尾張の無住のごく近くにも岩蔵観勝寺において大円上人良胤と弟子として起居を共にした良敏がいた。空円も観勝寺にゆかりの僧」か、

と推測したが、「実賢—良胤—良敏—常円—空円」と次第する書写奥書を有する一軸の典籍がある。

『雑談集』が嘉元三年（1305）閏十二月二日に万徳寺において既に慈眼によって書写されている点、更に「永仁五年十二月五日、於醍醐寺金剛王院／＼以大僧正御坊御本書写了、金剛佛子常円／＼以先師常円御本、了智空円令書写了」（万徳寺藏『伝法灌頂三摩耶戒作法』一卷奥書）をも踏まえるならば、嘉元三年（1305）頃の万徳寺、性海寺、勝福寺という金剛王院を本流とする、この三箇寺に典籍・情報などの相互交流が鎌倉時代後期に行われていたことを予想したが、その点で新たに加える典籍が存するのである。

正元二年（1260）の性海寺や嘉元二年（1304）の万徳寺における書写相承をうかがうことのできる格好の資料が東寺観智院藏『三摩耶戒儀式』一軸である。次に扱う伊藤聡氏紹介の『無住撰述三昧耶戒作法』にほぼ同文で一部異文を混じた金剛王院實賢の『三摩耶戒儀式』で、比較検討すべき資料として本誌次号に全文を翻印掲載する予定である。

〔金剛王院

實賢

三摩耶戒儀式〕

と始まる一軸の奥書は

〔書本云

嘉祿二季十一月十四日於北白川殿嶺草庵以禪林寺本書写了

金剛佛子實賢（于時／五十一歳云々）

延應元年（乙／亥）四月十四日於北白川殿嶺御庵室以醍醐

金剛王院御本書写畢

金剛佛子良胤（于時／廿八歳云々）

正元二季三月八日申下金剛藏院御本於性海寺書写了

右筆 観海 十九

良敏

文永二季（乙／丑）六月六日於来迎寺書写了右筆常円

（三句／三歳）

嘉元二季二月廿八日於万徳寺方丈南面書写了 卅七歳

右筆守賜方丈御本空円寫之畢

（朱）

永仁五年十一月卅日於醍醐寺賜前大僧正寛濟之御本重交畢

御本云押昏上之注□□□私所云也

二反交した

大分無相違少々所違書人之畢

嘉曆三年(戊辰)九月廿五日於葉師寺之金剛佛了賢

傳受円真 □□ 右筆良賢一交

貞和四年十二月廿五日於美濃國大野郡衣斐庄葉師寺書寫畢

右筆金剛佛子 貞智

一交した

延享四丁卯歲季夏望日修復了

「実賢―良胤―良敏―常円―空円」の流れを端的に把握できる資料であり、貞和四年に美濃國大野郡衣斐庄にての書寫を伝える。「美濃國衣斐」といえば、小助川元太氏も紹介する『康富記』嘉吉二年九月十七日の記述に「岩藏(觀勝寺)之末寺」「美濃國衣斐寺」とある「衣斐寺」が想起される(「斐」・「裴」の用字に問題は残る)。或いは、こうした本末関係は、貞和四年(一三四八)以前に遡る可能性、鎌倉時代無住の頃に成り立っていた可能性は高いのではないか。また「正元二」年の「右筆觀海」は『円照上人行状』にも「尾州人」として良敏とともに円照門下にその名を拾うことができる。良胤は、無住にとって看過することのできない「存在」であった。

次に相意上人思融の「存在」である。伊藤聡氏「無住撰述三昧耶戒作法解題」并「翻刻」(『豊田史料叢書 猿投神社聖教典籍目録』平成17・3)などで紹介され、始めて指摘された重要な事実である。

b 「195 諸弟子等、具二一足一受」持、諸  
仏菩薩、清淨戒一竟是事  
如是持、授戒竟

小野ノ六帖二用地持ノ掲磨一ヲ広沢

同之、三寺院式頗ル不審之

200 問依 大師御作行之

天王寺ノ

非自由ノ儀ニ勝覺院ノ相意

上人全ク同此儀ニ後日ニ聞ク之ヲ

一帋ノ表裏書之ヲ 多年行

之ニ 彼上人如此、(戒僧語之ノ弥々信用)「

伊藤聡氏は、「猿投神社蔵の無住撰述『三昧耶戒作法』について」(『愛知県史研究』5号 2001)、「無住撰述三昧耶戒作法解題」并「翻刻」(『豊田史料叢書 猿投神社聖教典籍目録』平成17・3)で点線囲みの部分は貼り紙に

無住が自筆墨書したものと認定され、天王寺勝鬘院相意上人について略述紹介している。勝鬘院相意上人、円珠上人とも称される思融については、既に牧野「日本中世文学における十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺」（『実践国文学』79号 2011・3）、「思融―良含」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと」（『前掲誌80号 2011・10）、「延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク」（『前掲誌85号 2014・3）、「根来寺」四周と延慶本『平家物語』―その「往還」の試み―」（『説話文学研究』50号 2015・10）ほかに詳述したので、ここでは触れない。近時、宇都宮啓吾氏「智積院藏『醍醐祖師問書』について…意教上人頼賢とその周辺を巡って」（『智山学報』64号 2015・3）ほかによって、新出資料が紹介され思融関連資料に新たな展開がみられたことは、遁世上人の資料的な「乏しさ」を補う上で極めて有益な発見であった。思融が円珠と名を改め、相意上人と称して泉涌寺・醍醐寺・金山院・天王寺・家原寺などを拠点にして巡歴し活動して止まなかった事実は、当時の状況を踏まえて考慮するならば、無住にとって重いものであった、と考えられる。「戒僧」が「語」、「弥々信用」という無住の貼り紙墨書は、先に検討した大円上人良胤の項と併せて、戒壇院系の遁世僧をも視野に入れた無住における「立ち位置」がほぼ見えて

くるのではないか、と思う。相意上人思融と白鳳寺・無住の関係は深い。思融の弟子に実融がいる。白鳳寺所蔵典籍に實融・澄豪の奥書署名が存するが、改めて検討すべきか、と考える（口頭発表「根来寺と延慶本『平家物語』の周辺資料」（於国文学研究資料館 2015・8）で触れる）。

ここについてをもって、一点の血脈資料を紹介する。『実践国文学』85号（2014・3）所収「延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク―根来寺「四周」―頁18に「野澤大血脈」（『続真言宗全書』巻25所収）の問題を採りあげたが、その血脈の生成を考える上で極めて重要な血脈があるので、簡紹する。近く全文影印・翻刻を期したい。大円上人良胤や「思融―良含」の相承次第を端的に示すものである。簡単な書誌事項を記す。

東寺藏 又別22・31

血脈見聞 仁和 西酉

〔南北朝〕写

一軸

① 缥色後補表紙（高さ約27・6cm）、斐淡茶題簽を貼り「血脈見聞（仁和／西酉）」「妙智房／静基」／「一本諸流血脈下」〔「内朱書」墨書（賢賀の手か）

② 見返し、幅約19・3cm

③ 第一紙、端裏打付書外題「真言血脈 仁和 西酉」と墨



書（本文別筆か）

④「血脈見聞 仁和 西酉／

●（朱、以下同）真雅僧正」〈朱（以下同）〉

南池院／僧都法名成願初ハ入護命僧正、室ニ學／

⑤原料紙 第一紙 13行（幅約33・9cm）、益信僧正の「或記云」3行分で裁断、第二紙（継紙、幅約16・1cm）を補い、第三紙（幅39・7cm）「道助」より始まる。第四紙（40・1cm）、第五紙（40・1cm）（以下略）

仮に注記箇所の一例として「宏教」の項を引く。

「此流ニハ一切諸尊ノ本誓ニ摩地大事秘密決等ヲ皆以下一習之ノ則印義ト云文在之ニ又三代ノ別ノ記六通ノ長記ナント云テ此流ニ為ス重書ト一関東ノ辺ニ賞翫スル流也 仰云此人ハ住ス西院ニ一而師ノ匠云大事ノ正教盜テ書写之ニ謂最寛ノ裏書ノ箱封ヲ附テ納置ケルヲ 此宏教放テ箱底ヲ一盗出テ書写スル之ニ處ニ師匠彼部屋ノ前ヲ兒ト共ニ縁行道シテ有ル處自部屋ノ中ニ所盜写一重書被ノ風吹ニ出ツ兒取之ニ奉見最寛ニ而此ノ正教ハ封ノ付テ所レ置正教也ノ見彼ノ箱ヲ一放箱尻ヲ取出之ノ腹立シテ忽ニ追出於坊中ヲ一依之ニ鎌倉ヘノ下向シテ諸人ニ授真言ヲ一而正教等不隨身ノ一之間少々造出テ授人ニ一仍此ノ人ノ流ノ関東ニノ翫

之一似タリニ風情似タリ○立河流ニ一殊ナル諸尊法ノ次第无之ノ

⑥尾題なく、27紙末尾

此諸岩藏寺大円上人良胤受金剛ノ王院僧正実賢傳記之云々

（別筆、賢宝の手で）

「雖此記妙智上人静基用光上人所集歟可（糺）之ノ非岩藏上人記有参差事可□（不読）之 賢寶記之」

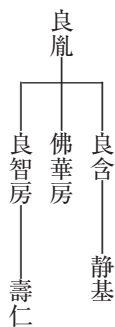
（紙継）

「天和三癸亥年中旬命岸氏如蓮令修復之ノ了ノ法印杲快」

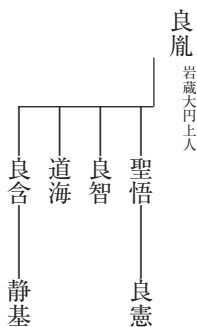
この一点は、続真言宗全書所収『野澤大血脈』や『密宗血脈鈔』にほぼ全文吸収されて活用される血脈資料であるが、『野澤大血脈』や『密宗血脈鈔』の誤り、例えば「宏教」ノ注記ノ位置の誤りを正し、覚成に附された注記「号保寿院大僧正」仰云保寿院流始也。中納言忠宗息」以下の記述も『野澤大血脈』や『密宗血脈鈔』が「仰云」をうけての記述と「号 大僧正」中納言忠宗息…入滅」仰云保寿院流始也」とを混淆しているなど、東寺藏「血脈見聞」によって多くの誤りを指摘できる（近く全文紹介を予定）。

更に相承の吊り鉤に関して相違する一例を挙げる。

『野澤大血脈』 p 51下段は次の如し。



これに対して東寺藏『血脈見聞』は、



となっていて、「壽仁」が吊られていない。

また、『野澤大血脈』に吊り下げられた「壽仁」という僧名は、東寺藏『血脈見聞』には見えないが、p 363上段『密宗血脈鈔』下に、次の本書写奥書が

「徳治二年十月十五日於東山白毫院」馳筆畢

嘉暦三年<sup>壬辰</sup>十一月二十五日戌時書了。筆師生年<sup>五十三歳</sup>壽仁

至徳元年…(略)

とあり、「壽仁」の「嘉暦三年」頃の書写が認められる。

このことは、賢寶手沢書入の東寺藏『血脈見聞』が書写も極めて古く、『野澤大血脈』、更には『密宗血脈鈔』の成立に係る基本的な原資料的な位置にある「血脈」を推測する上で極めて有益で良質な写本であることを証している。嘉暦三年以前のおよそ「徳治二年」頃の古写本を賢寶が入手し、書写（令写の可能性については検討していない）の後、追記、修訂を自ら施したもの、と考えられる。

## 二、遁世僧の遊歴寺院のネットワーク 付「東山靈山」

かつて牧野「中世天台談義所の典籍受容に関する考察」(『延暦寺と中世社会』(2004・6 法蔵館)、「中世寺院資料をめぐる二、三の問題—伝領墨署名慶舜・泉涌寺版『四分律含注戒本跋行宗記』の底本—」(『実践国文学』82号 2012・10)、「談義所通藏聖教について」(『実践国文学』83号 2013・3)において駿河智満寺旧藏典籍類の通藏の問題を扱ったが、改めて遁世僧が「遊歴」する寺院ネットワークとして典籍の移動を捉えなおしてみると各寺院の地勢的な「位置」の重要性が判明する。伊州走湯山来迎院・駿州智満寺・越州豊原寺・相州西明寺などであるが、今回は相模国松田の西明寺を考える。

既に納富常天氏が『善光寺縁起』(続群書類従 28輯上



頁一八七〜一八八）を挙げて指摘して周知のことであるが、浄蓮上人源延が相模国松田の西明寺を創建したという伝えである（納富常天氏『金沢文庫資料の研究』、法蔵館、一九九五年）。

「仍一寺作貴寺内承諾。許浄蓮上人拜見訖。即諸衆相議自寺送書狀於上人。其比浄蓮上人相摸国西郡辺松田云所建立一寺折往生号西明寺。善光寺使者尋行彼寺。折節駿河国智満寺為大曼荼羅供大阿闍梨得囑請渡給。仍使者即參彼寺。上人開善光寺書狀。捧目上置頂上秘泣。状旨不披露。而自其弟子同行弟子相模還之。独身參詣善光寺。」

という展開のなかで、「相摸国西郡辺松田云所建立一寺折往生号西明寺」「折節駿河国智満寺為大曼荼羅供大阿闍梨得囑請渡給」という。即ち源延のネットワークが相州松田西明寺・駿河国智満寺・信州善光寺という重要な拠点寺院を結ぶものであること、さらに留意すべきは善光寺如来像の模造・鑄造を依頼したのが越前の仏師・法橋海繩であった、と記すことである。

駿州智満寺・伊豆走湯山という源延のネットワークを考慮するとき看過できない「越前」の問題である。駿河智満寺旧蔵典籍類の通蔵の問題を扱った際に浮上した一点、越前の豊原寺と智満寺・伊豆走湯寺の間で旺盛な典籍の書写活動が行われた、という事実（「中世寺院資料をめぐる二、

三の問題―伝領墨署名慶舜・泉涌寺版『四分律含注戒本跋行宗記』の底本―）『実践国文学』82号 2012・10）である。実際に、大塚幹也氏「島田市・智満寺の千手観音像懸仏とその信仰」『史迹と美術』（71号 平成13・1）によると、藤枝市の高根白山権現所蔵の大般若経（建久十（一一九九）年の奥書が確認できる）には智満寺と清水寺の名が認められ、智満寺と清水寺の僧が共に書写している、という。平安末期から鎌倉初期にかけて、智満寺と白山勧請の近隣の白山権現社には緊密な交流があった。白山信仰を介して智満寺と白山ゆかりの豊原寺に典籍書写にとどまらない交流の存在したことを想定してよいように考える。

これに近世の縁起ではあるが、「源延上人承久三年所寫造也」との造像伝承が性海寺にも存するので紹介しておく。

「尾州中島郡大塚山性海寺来由記

性海寺者、尾州真言門四大寺之一招提」而、在中島郡大塚邑矣、上世大師創基、中古）良敏汲流今也、……（略）……本尊阿弥陀如来并両夾侍之銅像者、信）州善光寺之肖像、浄蓮源延上人承久三年）所寫造也（別有善光寺如来縁起、更檢）……」（『新修稲沢市史』資料編七、古代中世

昭和58・11）

いづれにしても、源延の駿州智満寺・伊豆走湯山寺・相

州西明寺・越前豊原寺（白山）と拡がるネットワークは、相州西明寺が置かれた地勢上の枢要な「位置」を確認することで、単なる寺院間の「交渉・交流」（典籍の移動・僧侶の往還）にとどまらない政治的・軍事的にも枢要な意味をもっていたことを近時の野口実氏の論文で知ることができ。

多賀宗隼氏「平清盛と東国」〔『日本歴史』513号

1991）他多くの論考があるが、近時の野口実氏「平清盛と東国武士」〔『立命館文学』624号 2012・1〕第二章「清盛の富士・鹿島参詣計画」が指摘する相模国松田は、清盛の富士・鹿島社参詣計画に係わる重要地点で、史料三點、『山枕記』治承三年正月十二日条、『延慶本平家物語』第三末の七、『長門本平家物語』卷第十三「頼朝義仲中悪事」を挙げて、「松田郷は東海道の足柄越ルートと太平洋に注ぐ酒匂川の交差する水陸交通の要衝に位置しており、多賀氏も指摘されているように、古来、足柄上郡の中心を占めていたのであろう。源義朝健在の頃、波多野義通の妹（義常の叔母）を母とする源朝長はここに館を構え、近隣の武士を配下に統合する動きを示していたのである。」とする。更に、「とするならば、二十五間という巨大な侍所を付設した御亭は、治承三年正月に予定されていた清盛の東国視察のために造営されたものと考えらるべきであらう。」と推

測し、「清盛は東国に下り、二十五間の侍所に、坂東はもとより甲斐・信濃・伊豆・駿河の武士たちを招集して主従関係を固めるための儀礼を行おうとしていたのではないだろうか。これら諸国からのアクセスに便利な水陸交通の要衝である松田郷に宿館が設定された」という。この「松田亭」を巡る考察を、源延の駿州智満寺・伊豆走湯山寺・相州西明寺・越前豊原寺（白山）と拡がるネットワークに結ぶならば、源延の西明寺創建の持つ地勢的な意味は頗る重いものとなる。しかも、いずれをも結ぶ信仰の絆は善光寺信仰（牛山佳幸氏諸論考参照）である。また、源延は、安居院「澄憲」の許で修学期を送っている点は留意すべきであらう。

なお、上川通夫氏「平安仏教の特質」（國學院大學文化講演会「国際シンポジウム 古代東アジアの仏教交流」2015・1・25）で展開された三河普門寺に関する種々の指摘は、相州松田西明寺同様に極めて重要なもので、源延の係わる駿州智満寺・伊豆走湯山寺を通じてクロスするもの（このクロスが、ネットワークの重要な点である）であった。

## 附 東山靈山

牧野「思融―良舎」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと」  
『実践国文学』80号 平成23・10）において展開した東山  
靈山院について、その後収集しえた情報のいくつかを、採  
りあげて若干の考察を加える。既に牧野「日本中世文学に  
おける十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺―書物ネット  
ワークの視点から」（『実践国文学』79号 2011・3）  
に覚書風に靈山・靈山院の記述を『円照上人行状』に  
拾ったが、「諱信忍、道号智生、居俗有忠、厭世求法、年  
二十二落髮、登高野山苦行、……彼此遊住、修大悲行、入  
照公門、住戒壇院、……移住金山、大助照公化儀、即文永  
二年八月二十五日重受具戒、宋人帰徳、洛東靈山建一堂庵、  
施与上人、後住持金山院、……」（『円照上人行状』下頁  
12下段）の一条に関連して、大塚紀弘氏「宋版一切経の輸  
入と受容」（『鎌倉遺文研究』25号 2010・4）指摘の  
一資料を挙げておく。

「鎌倉中期で注目されるのが、近江国湖北の三ヶ寺で、  
勸進僧によって相次いで宋版一切経が請来されたことであ  
る。まず応永十四年（一四〇七）の『已高山縁起』による  
と、浅井郡と伊香郡にまたがる已高山では、「書写百日百  
部之妙行」による勸進活動が成功し、入宋僧を派遣して文

永七年に一切経五千巻を得、同九年に供養の法要を行なっ  
た「44」。「在唐之密契」により、京都・東山靈山の全遠が  
導師を勤めた他、色衆として「近山之宿徳」が集められ、  
唄師は人吉寺、散華師は菅山寺の僧であった。両寺は竹生  
島とともに、已高山と「自他之合力」の関係を結んでおり、  
合わせて「北四箇寺」と称されたという。」

文永七年に一切経五千巻を得て入宋僧が帰朝し、同九年  
に供養の法要を行なったが、「在唐之密契」により、京都・  
東山靈山の全遠が導師を勤めた、という。

「文永二年八月二十五日重受具戒、宋人帰徳、洛東靈山  
建一堂庵、施与上人」という記述と併せ考えるならば、文  
永九年は宋人が東山靈山に一堂庵建立し円照門下の戒壇院  
系律僧信忍へ寄進して既に五年は経過しており、入宋僧の  
「在唐之密契」は、宋人と靈山との関係が極めて緊密な状  
況にあったことを示したものと考えられる。また、洛東  
靈山（金山院と隣接）と湖東三山などとの関連にも留意さ  
れる（菅山寺旧蔵思溪版一切経などの問題へ）。湖東の阿  
弥陀寺をも視野に入れた追究が可能になり、新たに延慶本  
『平家物語』への視界がひらけてくる。

いまひとり、東山靈山に係わる僧を挙げておきたい。天  
台三大部並びに疏記の刊行に関連して採りあげた忠源・憲  
實とも緊密な僧侶、公誉である。神奈川県立金沢文庫『五

寸四方の文学世界―重要文化財「称名寺聖教」唱導資料目録―(平成20年5月)で「なお「公誉法印草」と題する説草が数点見出されるが、「作法儀」(298函25号)所収の安居院系譜には、珍憲・澄憲・祐範・静覚・祐性・承源・公誉とあるので、これも安居院説草の一部と考えられていたものであろう。」と紹介され、近時、展観された同文庫「仏教説話の世界」(平成27年10・11月)にも触れられた公誉である。

松田宣史氏『天台宗恵檀両流の僧と唱導』(三弥井書店2015・11)が刊行された。その第三章『法花経』利益説話から往生説話へ」三『法花経』説話の改訂者」に「称名寺聖教」118函14 称名寺蔵金沢文庫管理『両界入三摩地口決』奥書を検討し、「宝治二年(一二四八)二十歳の年に、京都東山の霊山の坊で、岡崎法印成源の『両界入三摩地口決』を書写しているため、安貞三年もしくは寛弘元年(一二二九)生まれと知れる」と推定して、公誉が靈山に居たことは、「他に『義釈搜決抄』や『三千院円融藏文書目録』でも確認でき、晩年の正応三年(一二九〇)には横川首楞嚴院の檢校に補されている」と考証している。靈山院がほぼ同一の地域である鷺尾に位置していたこともあり、金山院との交流は自然であった、と考えられる。とくに正元元年(一二五九)に藤原隆親が円照へ金山院を寄進して以降、文永二年(一二六五)宋人が円照門下「信忍」

へ一堂庵を寄進してからは、戒壇院系の律僧との交流は緊密となったであろう。靈山で留意すべきは、定円・公誉を始め「安居院流」とのかかわりであり、いわゆる「叡山版」天台三大部注疏記刊行の結縁者の人脈であり、同時に三井寺との深密な交渉であるが何よりも先ず、中世後期の靈山院がまた諸宗包修の傾向を有した寺院であったこと(徳治年中の靈山院寂上人遍融の存在)である。

### 三、舶載宋刊仏書について―印面の問題

中世における諸宗包修を旨とする遁世僧の重要な営為のひとつが少なくとも宋代の刊行典籍(仏書中心)の移入とその復刻にあったことは、留意されていない。中世の出版史研究は従来も先学の重厚な業績が積み上げられてきたが、主として個々の寺院に限定した「□□寺版」の追究であった。諸宗包修を旨とする遁世僧のひとつの「動向」として捉え相互に関連する勸進行為として見渡す視点はなかったと称しても過言ではない。また、舶載仏書の印刷「物」としての検討から判明する多くのことがらが東アジアの出版史の解明に寄与する点も看過されがちであった。

ここに舶載宋刊仏書の刊刻(印面・破損など)に即した検討を試みる必要が生じるのである。



此間作若佛察…… (略) ……真福田應」

(第4板第6面第6行)

受供養不應住…… (略) 彼減度不復還來」

(第5板第1面第1行)

(b) の部分の裏の刷反故 (刷経の一部)

「證無量方便善巧得不思議住無畏他□□

諸衆生意樂差別無量億劫蘊諸覺慧□□

此諸大衆…… (略) ……於一切智智

及諸法藏…… (略) ……願聞如來決

□之義世尊…… (略) ……皆已知此諸苦

□及發趣善…… (略) 世尊是諸法□陀羅」

⑤ 1・2「(4) 稱 五百三十九卷(2) 五(4) 焉(?)」

フツウ

⑥ 1・2「(4) 稱 五百三十九卷(2) 六 ナシ」やや

摩滅

6板6面2行5字目至12字目、6板6面6行5字目

至12字目 補写、中国宋人の手・紙背刷経(c)

(c) 「如是乃至 涅槃我亦說為如幻 如化如夢所

見時諸天 子問善現言豈可涅槃亦如幻化

善現答言設更有法 勝……我

幻如○如夢所見所 以者何幻化

切乃至涅槃無二無 別皆不可得」

(c) の部分の裏の刷反故 (刷経の一部)

□□□不由□教住於忍

苦□□能發□勇猛精進

故求諸法智證入通達無

得佛大智超過一切世間

一切智智未足為難無辺莊

(界線)

⑦ 1・2「(3) 稱 (3) 九卷 七 ナシ」

7板6面2行、8板1面1行 補写(d)

(d) 「學受想行識有增有減別不學色有□有捨

亦不學受想行式有□有捨若不學色有□

…… / …… / …… / …… (第7板第6面第6行)

有可□受有可滅壞諸菩薩一切智智有可」

⑧ 1・2「(4) 稱(2) 九卷(2) 八(3) 保」やや清爽

8板6面5行6字目至13時目、9板1面2行6字目至

13字目 補写、中国宋人の手・紙背刷経(e)

(e) 「摩訶薩所學 般若波羅蜜多是大 波羅蜜多

是無量波羅 蜜多是無□波羅蜜 多波以故

橋尸迦色□ 故當知般若波羅蜜 多大受

想行識大故 當知般若波羅蜜多 亦大橋尸

…… / …… / …… / ……

…… / …… / …… / ……



(e) の部分の裏も刷反故（刷経の一部）、省略。

⑨ 1・2〔4〕 稱（2） 九卷（2） 九 ナシ フツウ

⑩ 1・2〔4〕 稱（2） 九卷（2） 十（2） 志」 やや清

爽

⑪ 1・2〔4〕 稱（2） 九卷（2） 十一（2） 深」 やや

清爽

⑫ 1・2〔4〕 稱（2） 九卷（2） 十二（3） 深」 やや

清爽

12板6面6行7字目至17字目地辺、13板1面2行7字

目至地辺、裏より紙宛てるも文字なし。↓補紙（f）

⑬ 1・2〔6〕 十三尾（6） 求」 やや清爽

13紙5面4行本文

「勝利」

「何文印造」（单杵墨文印） 2・6×0・7cm

(6) 第13板5面6行に尾題、「大般若波羅蜜多經卷第五百

三十九（一）稱」

(7) 卷末列記（尾題記）、第14板1面に

(4) 勸首住持傳法慧空大師 沖真」

證 會 靈 應 侯 王」

この後料紙ヤブレ、紙を継ぐ。

このようなブロック状の切り取りに摺り反故紙背を貼り付け、経本文を補写する例は、同じ王公祀堂本の卷三百九十八に認められるので、書影を以って示そう。

京都大学附属図書館蔵（谷村文庫）

大般若波羅蜜經 卷三百九十八

唐折一帖（三帖ノ内）

(1) 紺布貼帙入 梨地後補表紙（29・5×11・2糎）

(2) 見返し二面共紙

(3) ナシ

(4) 「大般若波羅蜜多經卷第三百九十八 霜」

(8) 三藏法師 玄奘奉 詔譯／初分常菩薩品第七十七之

一／／：／／：」

(5) 界高約25・1cm、每半折6行々17字、6面1板1紙

① 1・2「 求」

フツウ・やや清爽

② 1・2〔4〕 霜 八卷 二 用元」

フツウ

③ 1・2〔3〕 霜 八卷 三 ナシ」

フツウ

④ 1・2〔3〕 霜 八卷 四 ナシ」

フツウ

⑤ 1・2〔4〕 霜 八卷 五 純刀」

フツウ・やや太り・切れ

⑥ 1・2 (4) 霜 八卷 六 林明 「」

フツウ・やや太り

⑦ 1・2 (3) 霜 八卷 七 ナシ 「」

フツウ・やや太り・欠け

7板6面5行く8板1面2行(4行分) 補写、宋人の手・紙背刷経

「中都無所住何以故如是自性行者相一

切空故雖行無忘失法而於其中都無所住」

(第7板第6面第6行)

雖行恒住捨性而於其中都無所住何以故

如是自性行者相一切空故雖行一切智」

(第8板第1面第2行)

4行分補写部分の裏の刷反故(刷経の一部)

「辺慧是為諸菩薩摩訶薩印門印一切法以

此印門而応入於一切法中無辺慧復有

無障礙門無和合門諸菩薩摩訶薩應隨悟

入云何無障礙門無和合門謂虚空印印一

切法諸菩薩摩訶薩應入無著印門以空閑

印印一切法諸菩薩摩訶薩應入無二印門」

⑧ 1・2 (3) 霜 八卷 八 俊 「」

フツウ

⑨ 1・2 (3) 霜 八卷 九 溢 「」

やや清爽

⑩ 1・2 (3) 霜 八卷 十 垓 「」

やや清爽

⑪ 1・2 (3) 霜 八卷 十一 ナシ 「」

悪・太り・欠け

⑫ 1・2 (3) 霜 八卷 十二 ナシ 「」

フツウ・やや太り

(6)以下略

五行に亘る明州王公祀堂奉納施入の捺印がある。

紙背刷印反故の經典本文は、『大宝積経』卷4・5の部分

である。詳細は同じく『大宝積経』卷25の刷反故を用い

た京都大学付属図書館(谷村文庫)蔵の王公祀堂本『大般

若波羅蜜多経』卷398の補写箇所と併せて別稿の用意が

ある。併読願えれば幸である。

なお、谷村文庫は故谷村太二郎氏蒐集の古刊写の典籍コ

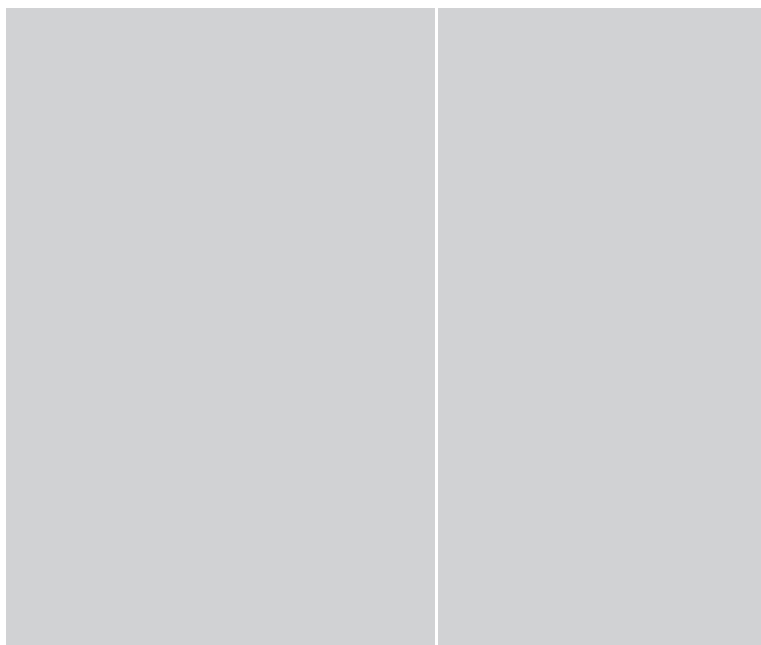
レクションである(『本を伝える―高山寺本と修復―』(京

都大学図書館機構 2015・10)。氏が趣味家の集う京

都月曜会などの有力会員であることを知る人は比較的少な

いようである。

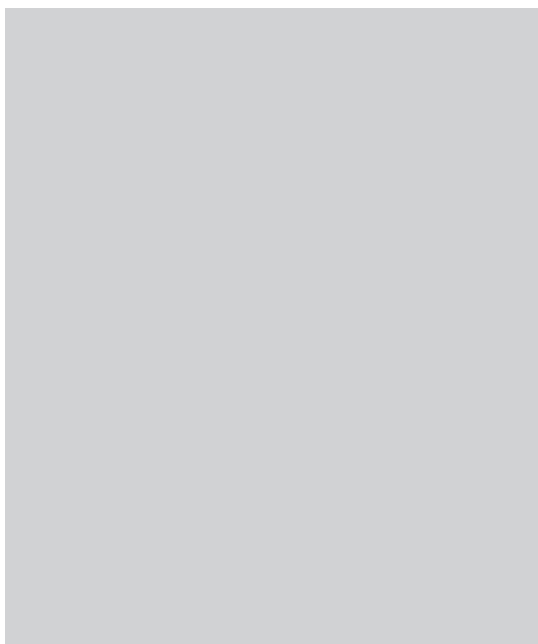
補写四行分の紙背を次に示す。



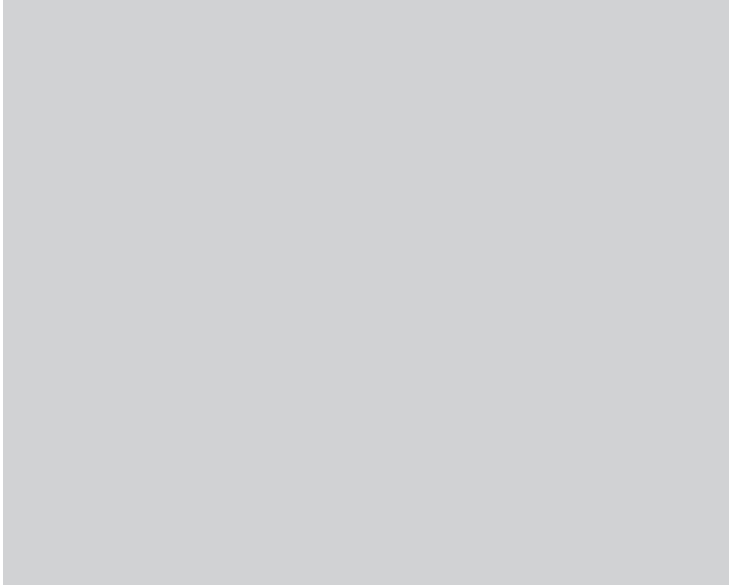
王公祀堂本の印面磨滅・破損とその対応処置の事例は、単行の律部三大部注疏記の宋版にも認められる。その事例を指摘し、中国版本学における版木の問題に及ぶ。

『四分律含注戒本疏行宗記』卷二下の第十四板4面5行目〜5面1行目にかけて、毎行二文字分欠ける個所が存在する。

こうした個所は既に中村一紀氏「資料紹介『一切経律部零卷十一種』『四分律剛繁補闕行事鈔』『釈金剛経纂要科



分』『金剛經纂要刊定記』『金剛般若經會解』(『書陵部紀要』62号 平成23・6)に指摘されているが、まま見られる。中村氏同論文の提出する例を左に再録させて頂く。



この他に『行宗記』卷二・下の14板第3・4面にかけて認められる文字欠損箇所を掲出する。



また、□のように四角にブロック化し四周に切れ(割れ)を示す箇所も認められる。ここでは『四分律含注戒本疏行宗記』卷一下の第一板5面2行目〜5面5行目にかけて第

7文字目と8文字目にかけてブロック化が起っており注目される。写真は今回は省く。  
次に掲げるのは『四分律刪繁補闕行事鈔』卷中之二の第一板5面3行目であるが、ブロックの入れ木（埋め木）が墨を以て四角く浮き出ている（「染心四」などを囲む）点は確認できよう。

王公祀堂本の四角いブロック状の切り抜き・裏に紙張り・墨書という修補を考える上で留意すべき個所と思われる。

文字の欠け部分に入れ木を施す前に行っていたか、と思われる。また、版木末行天地一杯に一行に亘り補筆墨書の施された事例も見出すことができる。

次に掲示する写真（前頁下段）は、板木の最末行一行分を未刷にして、その余白に補筆墨書した例（且住一處：）である。王公祀堂本では、切り取り・刷り反故紙背貼り・補筆墨書という修を行ったが、『四分律刪繁補闕行事鈔』卷中之三の第十五板5面6行目は、あえて刷印せず余白を残し経本文を同一料紙に補筆墨書している点が異なっている。

中村一紀氏「資料紹介」『一切経律部零卷十一種』『四分律刪繁補闕行事鈔』『積金剛経纂要科分』『金剛経纂要刊定記』『金剛般若経会解』〔書陵部紀要〕62号 平成23・6)の解題の一部を抜書きする。「刊記等 刊記等で年紀が明らかなのは、後掲一覧にも示すように、ア群では『行事鈔』下四に「紹興三年」（一一三三）の重刊記、『行宗記』一下に「嘉定癸酉」（六年・一一二二）校記が、またエ『刊定記』巻六には「淳熙丁酉」（四年・一一七七）の刊記（写真6）が認められる。いずれも南宋中期までの年号である。『行宗記』一下の嘉定六年は他の二つに比べ時代が少し降るが、本文は南宋前期の版に補刻葉も交じっている。この校記は補刻時のものと考えてよい。」という。また「刻

工名 経名、丁数、刻工名など冊子本では版心に刻まれる事項は、すべて各紙右端の継ぎ目糊代部分に刻される。そのため判読可能な箇所は限られるが、判読できる刻工名は後掲一覧に示した。そこに見られる刻工達の多くは阿部隆一氏、尾崎康氏ら先学の調査により南宋中期までの出版物に見られ、特に「徐彦」「高起」「洪茂」「方成」「汪政」「江先」は、書陵部でも所蔵する紹興年中（一二世紀中期）明州刊『文選』など、南宋前期の書籍に確認でき、また「高起」「洪先」「施宏」は、南宋前期に湖州（浙江省）思溪の円覚禅院で王氏により開版された思溪版一切経の刻工中にも見える。

エ『刊定記』は目録に「四明洪悦洪昌楊昌陳章版」と記されるように、巻六末尾に「四明洪悦洪昌／楊昌陳章刊雕」（写真6）と刻されており、洪悦、洪昌、楊昌、陳章が刻字したことが知れる。やはり南宋前期に活動した刻工である。各葉での記載はない。

印記 まず、ア群は目録上に「四明姚家版」と註記されているが、その依拠するところは『行事鈔科』、『戒本疏』二下、同四下、『戒本疏科分』の四帖を除く全帖の巻末に縦三・四、横一・四竹の「四明姚家／印造経書」（写真2）「空覚」印もそうであればア群の将来には空覚なるおそらく僧侶が関わり、明州の姚家という経鋪に印刷させたと考えること



が出来る。」

以上、王公祀堂本という紹興壬午の奉納施入記が存する東禪寺版大藏経の印面・破損・補写について検討し、ほぼ同じような印面・破損・補写の状態を『四分律含注戒本疏行宗記』などで示した。書陵部蔵『四分律含注戒本疏行宗記』は、東寺蔵『四分律含注戒本疏行宗記』より後刷りであるが、かなり近い頃の摺りで、およそ嘉熙二年(一二三三)以降の間もない頃に刷られたか、と推定できるものである。刊行時期より既に百有余年はゆうに経っており、その間に補写・補刻・入れ木などなど、様々な修が行われてきたのである。王公祀堂本の東禪寺版の大般若経もまた、紹興三十二年に至る間にはほぼ板木の補刻は全面にわたり、その補刻葉に既に検討したような破損・補修が行われていたことになる。

\* \* \*

本稿は、以下の二つのシンポジウムでの発表内容の一部に若干の資料を加え展開したものである。

- ① 「根来寺と延慶本『平家物語』の周辺資料」(シンポジウム「紀州地域と寺院資料・聖教―延慶本『平家物語』の周縁―」(於国文学研究資料館 2015・8・1))
- ② 「福州版大藏経の一、二の問題―印面・写刻体など―」(国際シンポジウム「人類共有の資産としての東アジア

ア文史哲(於韓国ソウル東国大学 2015・12・12)

今回もまた貴重な典籍の閲覧・調査の御許可を賜った宮内庁書陵部・東寺・本源寺、書影掲載の御許可を頂いた京都大学附属図書館・書陵部、国外においては中国国家図書館の各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

なお、ここに平成二十七年科学研究費(基盤研究(B)、課題番号・70123081)の助成に拠る研究成果であることを附記する。

(まきの かずお・実践女子大学教授)